

衣を脱てあらぬ服をつけ、茶をたつるに辨利なるやうをはからふ禮の相當らぬをいかん、又必禮服をつくべきならば、官位ある人はるぼうし裝束なるべきを、さてはせばき入口の名におふにじりあがりかなふべからねば、首服を脱、上をとり、さしぬき計にておはさんか、凡か、ればはたして禮による歟、よらざるか、書院のあつかひは別なるべけれど、これはたゞさまの茶室のうへにておもへる也。

〔茶湯古事談^三〕一或宗匠のおしへに、今の世の武士、露地へむかひに出る時、無刀にて出る事はあやまり也、腰懸にては、客何も大小さして居るに、いかに馳走なればとて、無刀は不心掛なり、小座敷にては、客無刀なれば、亭主猶更無刀にて出るが本意也とらん。

〔茶道要録^下法〕刀掛附扇子之事

扇子ハ禮義ノ一具トテ必ズ持座中ニハサ、ズシテ持ベシ、最モ不可遣、扇子ニ形アリ、長サ一尺七分ニシテ、地紙ノ色、淺黄ト柿色トノ大小ノ筋揉砂子也、是ヲ表トス、裏ハ總金ニシテ、白萩白薄ヲ畫ス、利休ハ俵屋正叱ニ令書トナリ、居士^{利休}ガ所持ノ扇子四方庵ニ有テ見之、扇子ノ禮器タル事、笏ノ遺式ヲ以テ也。

〔梵舜日記〕元和二年正月廿二日、關東江戸越中殿へ萩原殿方ヨリ年甫禮、鈴鹿藤十郎差下也、次而ニ予爲音信、數奇屋踏皮二足差下也、則書狀文言、

新春之御慶雖事舊候不可有休期候、萩原方ヨリ以使者申入候、由候間令啓上候、隨而數奇屋踏皮二足進上候、目出度御祝儀計候、猶途餘音可得貴意候、恐惶謹言、

正月廿二日

近源

羽柴越中殿

人々御中

〔柳亭記^下〕數奇屋足袋